

---

# **彼の者の眸は何を見るか**

樹村みなみの

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼の者の眸は何を見るか

### 【Zコード】

Z4860Z

### 【作者名】

樹村みなみの

### 【あらすじ】

琥珀色の双眸の先に未来を見る少年、雨堂戒人 現在にも生きられず、未来にも生きられぬ。立ち位置の瞭然としない異才の少年は、それでも道を選ばねばならない。現在、未来、そして過去に引き裂かれる少年に、また冬がやって来た。

宜しければ、縦書きでお楽しみ下さい。

## 一章 露月の趣

夜陰に、赤い光が差す。

秋祭りである。

朝から降つていた雨はすっかり上がったようだつた。

境内に至る石階段を背に人を待つてゐる。顔を合わせるのも久方振りであるから、共に祭へ繰り出すなど幾年振りだろうかと、そつと背後を見上げた。

祭の様子を直接窺うことは出来ない。けれども階段を上つた先、鳥居の向こうから明かりが洩れいでいる。声が溢れている。それらはこれ以上ない誘惑であった。

視線を戻す。待ち人は未だ現れない。手持無沙汰になつて浴衣を少し直す。ただ、余り弄ると余計に着崩れそうであつたから、それも程々にしておいた。

少しなら 良いだろつか。

再び振り返る。

背に届く祭の喧騒が、こちらを呼んでいるように思えたのだ。おいで、おいでと、唄つてゐるよつに聞こえるのである。

一步、石段を上つてみた。草履の裏が階と擦れて、ぞりと音を立てて、踏み付けた小石の摩擦感は心地良く、一二歩三歩と足は階段を上つて行く。本来であれば待ち人と共に見る筈であった光景を、自分は今、ひとりで覗こうとしている。それは何やら、こそりと摘み食ひをするようで、愉しい背徳うしろめさがあつた。

果たして、石階段の先にそれはあつた。

煌々と眩しく、がやがやと騒がしい 懐かしい祭の風景。境内の燈籠は赤々と燃え、整然と並んだ露店は喧騒と熱気に埋もれていた。歓喜と幸福の光景が、嘗て幼い胸をときめかせた景色が、一つの生命体となつて熱く脈動していた。

どん、と太鼓が打たれる。

その度、胸の奥が、腹の底が震えた。息が少し上がるような心地であった。赤橙色に燃える視界に、暫しの間、心奪われていた。

けれども。

炎の中に一点、闇が差した。

祭の焰に切り裂かれ、搔き分けられた夜の暗闇が忍び込んだようだつた。

少年がひとり、こちらへ歩いて来る。

黒の浴衣に黒漆の下駄 けれども鼻緒は鮮やかな琥珀色で、それは彼の眸の色と揃いであつた。

愉悦しげな祭の有様から離れなかつた視線が、今は彼の歩みに縫い止められている。一陣、柔らかに吹いた秋の夜風が、彼の癖っぽい黒髪を揺らした。提灯の明かりに、彼の白い頬が照つている。

ふと、目が合つた。

からり、からり。

喧騒のうねりの中、それでも彼の下駄の音は美しくも軽快に耳朵を打つた。

蜜のような琥珀色の双眸 その色は境内の赤い炎にも侵されることなく、それこそ自ら光を放つてゐるかのようであつた。合つていた視線が、再び離れる。

黒衣の少年は傍らを過ぎて、石階段を下つて行つた。

次第に遠くなる下駄の音を聞きながら、祭は始まつたばかりだと云うのにもう帰つてしまふのだろうかと、そんなことを考えた。

朦朧と夜空を仰ぐ。雲はない。

月影もまた然りである。

そこで不思議に合点が行つた。

彼こそが今宵の月であったのだと、去つてしまつた少年を思つ。漆黒の夜気を纏つた艶やかな二つの琥珀石 その持ち主は、振り返つた先にはもう、いなかつた。

待ち人はまだ来ない。

## 霧月の趣序

### 【序】

雨音が響いている。雨粒がガラス窓を叩いている。

薄曇い曇下がり これでは紅葉も散つてしまうだろうかと、考  
えるでもなくそんなことを思った。

雨堂戒人は黒革のソファーに深く腰掛け、ぼうと時間を潰してい  
た。傍らに新聞紙を投げ出す。世間は連續殺人だの死体遺棄だの贈  
収賄事件だと話題に事欠かぬらしい。

眼前の机には、一杯の珈琲と菓子のオブジェが並んで置かれていた。菓子のオブジェとは云つても、建材はマシユマロとウエハースのみで、ただそれらをそれぞれの層が交互になるよう積み上げただけの作品であるから、何処か中途半端な印象である。雨堂はそれを、今度は上からひとつずつ摘まんでは、徐々にオブジェの丈を減じて行つた。詰まるところ、戯れなのである。

事務所に主はいなかつた。別段彼女に用があつた訳ではないが、誰と話すでもなくひとりで、ただ積み上げたマシユマロを食してい  
る様は流石に幾らか間抜けではないだろうかと、雨堂は物憂げな視  
線を室内に巡らせた。

『木野崎ビル』と名の付いた雑居ビルの一室は小奇麗に片付いていた。バインダーがずらりと並んだ書類棚も、接客用の机及び一脚のソファーも、所長用のデスクも どれもこれも書類だの何だので埋もれていたのを雨堂が掃除、整頓したのである。散らかすことに関しても稀有な才能を有する事務所の主は、片付ける方面については無能甚だしく、またそもそも彼女にやる気がまるでないため、結果、事務所の掃除は雨堂の役目となつていた。

綺麗に整頓された室内ではあるが、果たしていつまでもつことやら 短く嘆息し、雨堂は珈琲を啜つた。  
そんな時である。

「この向ひで硬い音がした。傘立てに傘を入れる音である。」

「いやいや、本降りになつて来ましたねーって、あれれ。雨堂さん、来てたんですか？」

雨堂は視線で返事をし、マシユママロを頬張った。

「を開けて入つて来たのはひとりの少女で、防寒のためかセーラー服の上にジャージを羽織つている。所々濡れている辺り、どうやら慥かに、雨脚は幾らか強まつたらしく。雨堂が事務所を訪れた時には、傘を差してさえいれば身体が濡れるようなことはない程度のささやかな雨量であったのだが、雨音を聞いているだけでは強まつた雨の気配を察することは出来なかつたようだ。

少女は雨堂の向かいに座ると、軽妙な動作でマシユママロを一つ摘まんだ。

「いただきい」

「ひら」

「まあまあ雨堂さん、怒らない怒らない。苛々し過ぎると寿命縮みますよ？　あれ、これ、この間と違つマシユママロですか？　何だか、やあらかいですね」

少女　九絵ソラくいのえ

はすかわーいつ皿さらを手に取つた。

「それにしても駄目つすねー」

ソラはショートボブに整えた黒髪を弄りながら顔を顰める。

「癖つ毛は雨の日はどうも……んー、でも雨堂さんは何だか普段通りですね。雨堂さん的に何ぞうなんですか？　その頭」

「別に」

「何か冷たいですね。この間癖つ毛同盟結んだじゃないですか。でもまあ、雨堂さんの癖つ毛は何だかオサレパーーって感じですもんね。それに比べて私のは

「おまえのはまるで雑草だな」

「ざしち、つてそれ酷くないですか？」

「つむきご。声が大きいぞ、雑草女」

雨堂はソラへ呆れたよつた半眼を向けた。

慥かに、雨堂とソラは黒髪の癖毛であると云つては共通しているとも云えるが、各自の印象はかなり違つてゐる。雨堂の髪が「曲がっている、巻いている」と云つ印象であるのに対し、ソラの髪は「ハネている」と云つた風で、雨堂の方が随分と小洒落て見えるのである。ただ、ソラの髪は雨堂のそれよりも艶々と細く麗しく、それ故、何処か雑然とした癖毛であることは彼女が己を飾る上で大きな枷となつてゐると、それは雨堂から見ても明らかであった。ソラが髪型をショートボブに整えているのも、伸ばすと收拾が付かなくなるためなのだと云つ。

「わ、私が雑草なら、雨堂さんは海藻じゃないですか！」

ソラは愛らしい顔立ちを反撃の色に染める。けれども

「いいぜ、それでいい。オレは海藻、おまえは雑草。お互い納得だ」

雨堂は動じず、ウエーハースに手を付けた。ソラも負けじとウエーハースを両手に一枚ずつ取る。何やらおかしなところで張り合つ奴だと雨堂が薄く苦笑すると、ソラはそれを嘲笑と受け取つたのか、墨で引いたような美しい眉をぐつと歪めた。一重瞼の下で、大きく黒い虹彩に囲まれた眸ひとみが悔しげに光る。

「な、納得じやありません。雑草は流石に駄目です。何かこう、ないんすか。もうちょっとアレな、ね？」

ソラは「アレ」の内容を表現したいのか、彼女なりに工夫したつもりなのだろう身振り手振りを様々に交えたが、どうにも理解不能、意味不明である。新手の呪いでも掛けられているのではないかと、雨堂は割と真面目に訝つた。

「あーあ。もういいや。結局、雨堂さんは勝ち組癖つ毛つてことですよね。海藻サラダと雑草サラダじゃあ、比べるまでもないですね。いいなあ、オサレだなあ、海藻」

先程までこちらを揶揄するため用いていた「海藻」と云う言葉を、今度は羨望の声色で呴く様は滑稽であつたが、また珍妙な呪いでも掛けられては敵わぬので、笑うのは止しておいた。

ソラは何やら思案顔で立ち上がると、事務所の奥の扉を潜つて姿を消した。喉が渴いたのだろう。奥の部屋には簡単な台所があつて、冷蔵庫には何かと飲み物が揃っている。

それにしても 九絵ソラは変な女だ。雨堂は窓の外に目を遣りながら思った。すると途端、雨脚は猛烈に激しくなり、窓ガラスはびたびたと濡れて、外の景色は飛び散る水滴に紛れてしまった。ただ景色と云つても、面白味のない雑居ビルが立ち並んでいるだけであるから、それが隠れてしまつたところで別段どうと云ふこともない。ばたばたと喧しくなつた雨音の向こうで「あらり、おひかしいなあ」と間の抜けた声がした。

「へンテコな女だ。再び思った。

言葉遣いは妙に馴れ馴れしい反面、聲音は澄んで耳に心地良く、粗雑さや下品さは感じられない。それどころか、種々の所作

譬如

えばマシユマロを摘まむ指の具合だの、髪を弄る仕草だのであると相俟つて、何処か上品な印象さえ感じさせるのであつた。あの軽い口調さえなければ、良家の娘と云われたところで疑わぬだろう。家柄と雑草頭は関係ないだろうからな、と雨堂はそこまで考えて胸中で笑う。

けれども普段の彼女は今と変わらず剽軽で、それが端々に見受けられる妙に嬌<sup>たお</sup>やかな仕草とどうしても釣り合わぬものだから 变

な女だ、と雨堂は九絵ソラを見る度思つてしまつのである。

指先で珈琲カップを弄びながら、漫然とそのようなことを考へていると、「雨堂さん」と呼ぶ声がした。困ったような、拗ねたような調子である。

「何だー？」

「私のサイダー知りませんかあ？」

云いながら、ソラが奥から戻つて來た。

「蜂蜜で甘みを出したプレミアムなサイダーなんすよ。オレンジ色のラベルの 知りません?」

それなら

。

「宵子が飲んでたな、慥か」

宵子、とは事務所の主の名である。

「え、ええーッ？ そりやないですよお……。あれ、期間限定でもう売つてないの？」

「事務所の冷蔵庫なんて一番危ないところだら。そんなところに置いておくおまえが悪い」

「仕事中にキュウとやうつと思つてたんですよ。あーあ、ちゃんと名前シールも貼つておいたのになあ」

ソラはしおぼくれた様子で再び奥に行くと、サイダーの代わりに炭酸水のボトルを取つて来た。味も香りも付いていない炭酸水の何が美味しいのか分からぬが、他人の嗜好に口を出すこともない。ただ、向かいに座つてボトルに口を付けたソラもそれ程美味そうに飲んでいる訳ではなく、だから、矢張り進んで飲むようなものではないなと思った。

「ところで 雨堂さんも宵子さんに呼ばれて来たんすか？」

「ん？」

「いやあ、そうすか。私もお仕事の話があるって呼ばれたんですけど、今回の仕事は雨堂さんと一緒にか。初めての共同作業 何か、照れるですね？」

ソラは「いひひ」と笑い、炭酸水を口に含んだ。

「おいおい待て待て。ひとりで話を進めるな。オレは別にあいつに呼ばれて来た訳じやない」

「あれ？ ジヤ、どうしてここに？」

「これだよ、これ」

雨堂は漸く半分程丈を減じたオブジェを指した。

「マシュマロ……」

「これも」

「ウエハース」

「そつ。これ、宵子が買った奴なんだ。あいつ考えなしに買い込んだ癖に、早々に飽きてほっぽり出したんだぜ？ それが、もうすぐ

期限切れだから」

「雨堂さんが処理しに来たと」

「や。捨てる訳にもいかないだろ」

雨堂は半ば慄然として、続け様に「一つ、マシュマロを口へ放り込んだ。

「じゃあさつき私がマシュマロ摘んだ時、どうして怒ったんすか」「あのなあ。幾ら余りものだからって、他人のもの食つ時は一言断れ」

「ああ、そすね。　すみませんでした」

ソラは頭を下げるついでに、ウエハースを掠め取つた。隙のない

娘である。雨堂はもう何も云わなかつた。

「それでも　初めての共同作業は繰り越しかあ

「繰り越さない。未来永劫、そんな機会はない」

雨堂が取り付く島もなく云うと、ソラは「またまたあ」と微笑んだ。

本当におかしな女だ。

小さく溜息を吐く。

「さて」

付き合ひ切れないと言わんばかりに、雨堂は傍らに置いた上着を掴んで立ち上がつた。「あれ、もうお帰りですか」と云うソラの声に応えるように、それを白いシャツの上に羽織る。

比翼仕立て、ダブルのチェスター・コートである。シックな印象が強くなりがちなチェスター・コートはある程度年を重ねた者向けであることが多いが、淡い灰色をした柔らかなメルトン生地のそれは、全体的に細身に仕上げられていて、齢十七の雨堂にもよく似合つていた。

雨堂はリジッドジーンズに包まれた脚をぐんと伸ばした。けれどもブーツの先が机に当たつて、それを慌てて引っ込める。先日求めたばかりの、明るい茶色をしたサイドゴアブーツである。ブローカーが美しい。

「そのタワー、残りはやる」

雨堂はオブジェの残骸を指差した。

「あ、どうもです」

ソラは敬礼だか何だか分からぬいい加減な格好で礼を述べた。

「本当に、もう帰っちゃうんですか？」

「ん？　ああ、マシユマロは思ったより腹が膨れる」

「もうちと、お話して行きませんか？　宵子さん、まだ来ないみたいですし　ほら、ひとりぼっちつて何だか寂しいって云うか、間抜けつて云うか。ね？」

雨堂はその言葉には答えず、珈琲がひと口残ったカップを奥の流しで洗い、そそくさと室外に続く戸へと向かった。

引き止められると余計に帰りたくなつてしまふ自分は、どうにも天邪鬼だと雨堂はドアノブに手を掛けて思う。或いはそれは、より強く引き止めて欲しい気持ちの裏返しなのだろうか。ならばそれは、宛ら親の気を引きたいばかりに悪戯をする子供のよつて十七歳の自分に当て嵌めると、酷く氣色が悪かつた。

「　雨堂さん」

声が掛かる。

「ん？」

自分に知らしめるような気持ちで振り返つた。

「えと　お疲れ様でした」

ソラは白い歯を見せて笑つた。未だ雨音の響く室内であったが、彼女の周りだけはすつきりと晴れ渡つたように見えた。何気なく、彼女の名前にはそう云つた意味や願いが込められているのかもしれないとつた。空ソラと聞いて、真つ先に雨天や曇天を思い浮かべる者などいないだろうから。

雨堂は「うん」だが「ああ」だが判別の付かぬ曖昧な返事をして事務所を辞した。

階を一つ下つて、ビルのエントランスに至る。雨脚はやや勢いを失つたようであつたが、それでも十分な量の水滴がアスファルトを

呻いていた。

雨堂は慣れた手付きで蝙蝠を開くと、木野崎ビルを出た。

濡れたアスファルトが水音を立て、それがブーツのソールが響かせる堅い足音と合わせる。

ああ、雨だな、と思った。

雨堂は意識的に歩みを速め、立ち込める雨煙の中へとその身を放り込むよつて、街を行った。

【?】

黒が似合つと云われたことがある。色が白いからだらうか。慥か、小学六年生の頃だった筈だ。けれども、黒ばかり着ていてはまるで死神のようだ。だから、黒い服は余り持たないようにしている。ただ、今身に纏っている浴衣は紛うことなき黒色で、宵闇との境が分からなくなってしまいそうだった。足元で涼しい音を立てる下駄も黒い漆塗りのものである。

初秋の風が柔らかに抜けて行く。耳には祭囃子が届いていた。秋祭りに赴いたのは気紛れであつた。男一人、綿飴を齧る姿はどうにも色氣のないものだったが、かと云つて色氣のある知り合いがいる訳でもない。屋台の親爺が「あんちゃん、ひとりかい?」と可笑しそうな顔をするので、早々と祭を切り上げて来た。ひとり、ぶらりと帰途を行く。

時間帯は半端であるらしい。祭へ向かう者、祭りから帰る者どちらの影もない。夜道はしんと静まり返っていた。  
さてと、歩む足を止めずに思案する。これからどうしたものか。自宅に戻つても良かつたが、時間は未だ宵の口であるから、と駅前の方へと足を向けた。

暫く行つた時である。　　ああ、飛び降りたのだな、と思つた。

それは何気なくだつたのだ。

癡か、それとも病か。

駅前を通り過ぎ、再び人気のない一帯へと差し掛かつた時のことを。

別段、切つ掛けはなかつた。雑居ビルが立ち並ぶその一角、日が落ちてから歩き回るような場所ではない。

眼球の裏に力を込めるように視界を揺らした。

眼前、浮かび上がったのは アスファルトに横たわる少女の遺骸であつた。

淡い橙色の浴衣、祭へ繰り出すため丁寧に結つたのであろう髪は崩れ、割れた頭部の内容物と混じつてひしゃげた両腕を汚していた。すっと視線を上げる。

六階建てのビル 「敷島ビル」とエントランスには銘打たれていた は何事もなかつたかのように佇んでいる。事実、未だ何事もないのだ。

祭囃子はもう届かない。

響くのは、電車や自動車の通過音ばかりである。  
けれども 人の声が微かに聞こえる。耳を欹てる 男女が複数人、何やら愉しげに話をしている。

屋上か。

上に向けた視線を維持したまま、また眼球の裏に力を込める。光を失つた眸をこちらに向けて落下してくる少女。落下速度に髪が靡く。彼女は先程転がつていた地点に寸分の狂いもなく墜落すると、また同様、重なるように潰れた。破裂した頭部は、宛ら浜辺で打たれた西瓜のようであつた。

酸鼻極まりない光景。

矢張り、飛び降りたのだ。

関わるべきか 幾らか逡巡した後、ビルのガラス戸に手を掛ければ、それは呆気なく開いた。するりと流れ込むように建物の内部に浸入する。

瞭い。

けれども、フロアを二つも上れば目が慣れた。ぼつと緑色に浮かび上がる非常灯を幾度も傍らに通り過ぎ、無機質なタイル張りの階段を上つて行く。

次第に近くなる声。

下卑た嗤い声である。何やら愉しい遊びに興じているようであるが、碌な所業でないであろうことは朦朧と想像出来た。

階段には、からりからりとこちらの下駄の声が響いており、屋上にもそれは届いている筈であつたが、その屋上にいる声の主は気付いていないようだつた。

足早に上る。

からりからり。

薄曇い階段。六階から更にその先、屋上には立ち入らぬようにと気持ちばかりのロープが張つてあつたが、それは軽々と飛び越えることが出来た。

上り切つた先、厚い金属製の扉に取り付き、ぐいと開け放つ。

露わになつた屋上には 男が一人、女が三、否四人か。

けれども彼らの立場はと云えば、男二人女三人が見下す側、残つた女 少女と評す方が適切か は見下される側と二つに大別できる。

屋上には明かりが一つ灯つていて存外に明るい。

髪を淡い色に染めた男たちは、ピアスだらけの顔面をこちらに向けて呆けていた。男たちの連れと思しき女三人も、男たちの奥でへたり込んでいる少女もまた、立ち現れた状況の変化に頭が追い付かぬと云つた顔でこちらを見ている。

数瞬後、三人の女たちが何やら慌てた様子で内輪揉めを始めた。

頭も股も緩そつだ。

胸中で吐き捨てるように晒う。

途端、男の一人が女たちに向かつて「うるせえぞッ」と喚き、もう一人を伴つてゆらりゆらりと身を揺すりながらこちらに向かつて歩いて来る。ゆらゆらとした歩き方はこちらを威嚇しているつもりなのだろうが、生憎、ゴリラの兄弟にしか見えなかつた。

眉毛のない不細工な顔が一つ、夜陰の中で半端な明かりを浴び、余計に酷い有様である。宛ら秘境に暮らす少數部族の呪いの面が如

きであった。見様によつては剽輕で滑稽だ。

さて、連中はどのような遊びに興じるつもりであったのか 半ば予想は付いていたけれども 三度、目玉に力を込めて、視界を揺らす。

三人の女は猿の人形が如く両手を叩き、嬌声を上げている。

男たちは 奥でへたり込んでいる少女を貪るように凌辱していだ。四足の獸がするように幾度も腰を振り、完全に弛緩した少女の身体を持ち上げては舌を這わせ吸い付き、一人で同時に自らを突き入れては、自らを吐き出す。

少女の内腿を伝う血液は、少女が先刻まで純潔であつたことを証していた。

唇の端を上げて、薄く笑つてみせる。挑発ではない。けれども、男たちはそう受け取つたらしい。瞬く間に激昂し、こちらへ駆け出した。

視界の最も奥、腰碎けになつて立てぬ少女はわなわなと口を動かしている。こちらに何かを伝えたいらしい。きっと、助けを求めているのではないのだろう。とつとつ逃げると、そう云いたいらしい

彼女の潤んだ唇がそう呴いたように見えた。

彼女は幼く見えたけれども、これから己に降り掛かるであろう運命を予想出来ぬ程初心<sup>うぶ</sup>でもあるまい。しかし、それでも尚、他者の心配をするようだ。自分を助けてくれと、泣いて縋つたりはせぬらしいのである。

それ程、頼りなさげに見えるのだろうか。

前のめりに走る男たちは、尻のポケットから光るものを持った。視界は未だ揺れている。

一つの視界が、僅かなズレを伴つて同時に進行している。少女は こちらでは腰を抜かし、そちらでは無残に犯されてい

る。

からり、下駄の音を鳴らした。

それは空間を清めるように響き渡る。

そして刹那 間夜に糸が走った。

琥珀色に輝く一本の光の糸が、千々に裂かれる筈であつたものを縫い止めるように駆け抜け、瞬時、尻を地に着けたままの少女の眼前で停止する。

残光はやがて霧散し、残るは丸い一つの濡れた琥珀石。

今宵は新月。

けれども慥かに、その場には月影が雅な輝きを放つていた。

「　れる」

五度目である。

九絵ソラは登校の途を、寒さに背を丸めて歩いていた。制服にジヤージと云う昨日の出で立ちに加え、今朝はマフラー、セーター、黒タイツの三者を動員したが、それでも鋭い冷氣は容赦なく身を突いた。故に、斜めの機嫌は更にその傾斜を増す。

昨日雨堂が事務所を去った後、一時間掛けてのんびりと彼の食べ残しを摘まんでいたソラに届いたのは、「ああ、今日は中止だ。また明日」と云う宵子からの電話であった。虚しい一時間であったと、ウエハースの食べ渾の残った皿を洗いながら肩を落とした。

吐息が白く濁り、そろそろと透き通つては、逃げるように消えて行く。

ソラの学び舎である領条園山高校へ近付くにつれて、同窓生の影が徐々に増える。それでも、ソラはひとりで道を行つた。

何気なく天を仰ぐ。青く晴れ渡つた晩秋の空に白い雲がちらほらと漂い、昨日の雨の名残はすっかりないようであった。

この寒さである。雨雲が残つていれば、或いは雪が降つたかもしれないと思った。

ソラには通学を共にする程の友人がいない。とは云つても、譬えばクラスで除け者にされているだとか、そう云つたことはないのだ。ただ、誰とでもそれなりに仲良く、当たり障りのない関係でそれが九絵ソラの立ち位置であった。

ソラの人懐こい剽軽な立ち振る舞いは「調度良い距離感」を築くのに役に立つた。外観としては、飄々としていたながらも人当たりの良い少女であり、けれども踏み込まれたくない範囲は誰にも侵されない。自分がマイペースな人間であることは十二分に承知していくことを変えるつもりも他人を振り回すつもりもなかつたが、ただ他

方で、学生生活で妙ないざこざを抱えるのも面倒であったのだ。

ソラの生活の重心は件の事務所にある。しかし、学生生活もきちんと送るようになると云うのが事務所の主である六ノ富音子の言葉であり、ソラはそれに従い、領条園山に通っているのである。

ならば　と、ソラは事務所の同僚とも云々そな雨堂のことを考へる。

彼も何処か高校に通つてゐる筈であるが、まるで彼の制服姿と云うものを見たことがない。ブレザーであるのか、それとも詰襟であるのか　そのどちらであつても、よく似合ひそうだと思つた。

雨堂戒人は一言で云つてしまえ、美形なのである。

小洒落た黒い癖毛、長い睫毛に奥二重、何処かあどけなさの残る  
顔立ち　白皙の美少年と云うのが適切な表現だろ。

何より印象的なのはその双眸で　それらは世にも美しい琥珀色をしていた。ソラは琥珀石と云うものを写真でしか見たことがないが、それでも或いは雨堂の眸の方が琥珀石よりも琥珀石らしいのはなかろうかと、そんな馬鹿げたことを考えたくなる程、彼の眸は魅惑的な色合いを湛えていた。

姿形の造りだけを云つのであれば　雨堂は慥かに美形ではあるのだけれども　世の中には、彼以上にハンサムな男など掃いて捨てても千切つて投げてもまだ余る程存在するだろ。それでも、彼に匹敵する程美しい眸の持ち主はそうそういうまいとソラは思う。彼がその気になれば、今ソラの周りを歩いている領条園山の女生徒たちに、片端から魅了の呪いを掛けてしまえるに違いない。  
そこまで考へて　。

けれども、その呪いはたちどころに消えてしまうだろと思つた。

雨堂には愛想と云うものがまるでない。きっとそう云つた概念そのものを知らぬのだとソラは確信している。表情の変化に乏しく、いつも不機嫌そうで、かと思えば皮肉を込めた笑みをにたりと浮かべたりするのだ。加えて、存外に口数が多いにも拘らず、歯に衣着せると云つことを知らない。そこのらの女生徒であれば、「雑草女」<sup>ザツソーオンナ</sup>

の一言で腹を立てるか、泣き出すか　孰れにせよ、彼に対する淡い恋慕は瞬く間に露と消えるだろつ。

そう考え、「雑草女」と云われた後も、別段いつも通り会話を続けることが出来た自分は何て懐が広いのだろうと、ソラは自己に大きな賛辞を贈つた。

気が付くと、眼前に正門が迫つてゐる。門の傍らに直立する体格の良い警備員は、浅黒い顔の中に白い歯を煌めかせて、生徒たちと清々しい挨拶を交わしていた。

予鈴が鳴つた。

腕時計に目を遣ると、余りのんびりとしていて良い時刻ではなかつた。

ソラは駆け足氣味に、門の内側へと滑り込んむ白い朝陽が頬に差すが、ただ眩しいばかりであつた。

「ああ、さむ」

言葉は白く立ち上る。

六度目である。

朝の教室は何やら色めき立つてゐた。予鈴が鳴つた後だと云つこともあるて、級友は殆ど自らの席に着いていたが、それでも周囲の席の者たちと忙しなく会話を交わしている。皆、眸を輝かせ、わいわいと愉しげであつた。

ソラは教室の中央付近に位置する自分の席に向かおうとして、眼前、徐に席を立つたその人物とぶつかつた。

「うわつと、ごめん。　おはよう、九絵さん」

「あ、どもす。　いいんちよ」

優しげに笑んだその少年、西銘成吾にしな せいごはソラのクラス　一年五組のクラス委員長を務めている。西銘は柔らかな眼差しを巡らせて、ちょっとした騒ぎだね、と云つた。

「皆、どしたんすか？　何か面白いことでもあるんですかね」

「あれだね」

西銘は白く細い指先を窓際に向けた。

教室の席は五つで一列が原則で、ただ窓際の列だけは四席で構成されている。筈なのであるが、西銘の指した先には五つ目の席がぽつりと佇んでいた。空席である。

「机、一個多いですね」

「転校生がね、来るんだ」

西銘は目を細めた。微笑んでいるのか、眩しいものを見るような表情である。母親に似たのか、純朴な少女のような顔立ちをしている西銘は、何かに焦がれているようでもあった。

「転校生、ですか」

「今朝会つたんだ」

「会つた?」

「うん。何だか立ち往生していたみたいだから、職員室まで案内して来た」

そこまで云つと、「それじゃ」と西銘は足早にその場を去つとした。もうすぐ本鈴が鳴る時刻だと云つのに何処へ行くのかと問うと、彼は「手を洗つてくるよ」と恥ずかしげに答えた。何やら氣拙い空気が流れて、ソラはそれを誤魔化すように自分の席に着いた。

十一月も終わりを迎えると云つ時分である。転校生が来る時期としては随分と中途半端ではないかと、ソラは考えるともなく思つた。それこそ、転校時期は冬休み明けを待つた三学期初めであると云つのが最も納得出来る展開であつて、それが一学期の終わるひと月前だと云つのは、無理矢理予定を割り込ませたようでもうにも慌ただしい。

余程急ぎの事情があつたのだろうか。譬えば親の急な転勤であるとか、離れて住む家族に介護が必要になつたであるとか。ソラは未だ顔も知らぬ転校生の家庭事情について、朦朧ぼんやりと妄想にも似た詮索を頭の中で繰り広げたが、それもじきに鳴つた本鈴に搔き消された。

暫くして担任である数学教師が戸を開けて教室に入つて來た。同

時、滑り込みで戻った西銘が号令を掛け、一連の朝の挨拶がなされる。結婚してから幾らか太ったその男性教師は、近頃また瘦せ始め、女子生徒の間では「奥さんに云われて、ダイエット始めたのかな」などと笑い話の種になっていた。けれども、それは馬鹿にされないと云う訳ではなくて、寧ろ彼は割と女子生徒に人気があった。曰く、切れ長の目が良いらしい。

「えーっと……」

担任は教壇からクラスを見回すと苦笑いを浮かべた。

「もう皆気が付いているみたいだな。うん、今日転校生が来る」

彼は云いながら、黒い表紙の学級日誌を最前列に座る日直当番に手渡した。

「まあ、僕が色々云つたところで始まらないし、兎に角入つて貰うことにようか。　おーい、入つてくれ」

担任が声を掛けて数瞬後、引き戸が開拉かれた。室内がしんと静まり返る。その静寂は級友たちの云い様のない期待感をたっぷりと吸い込んで膨らんで行つた。

果たして、ひとりの男子生徒が姿を露わした。メタルフレームの眼鏡を掛けた彼は黒板の前に向かうと白いチョークを手に取り、妙に整つた丸い癖字で自らの名前を記した。

転校生は小気味良く手に付いたチョークの粉を払うと、担任の促しに従つて教壇の斜め前に立つた。途端、級友たちは近場の相手と小声で私語を始める。それは勿論、転校生を正面から見てのことであつた。

西銘は誰とも言葉を交わさず正面を向いている。先刻会つたと云う転校生と視線を交換しているようであつた。

ソラもまた、誰とも言葉を交わさずその転校生を見詰めていた。けれども転校生は、ソラとは視線を合わせようとはしなかった。どうやら、かたく頑なにこちらを意識せぬようにしているらしい。ただソラはそんな彼の様子に気を留めることもなく、只管、予想だにしなかつた状況に目を見張つていた。

小洒落た黒い癖毛、長い睫毛に奥一重、何処かあどけなさの残る顔立ち 白皙の美少年と云つのが適切な表現だろう。何より印象的なのはその双眸で それは世にも美しい琥珀色をしていた。

「あれ、あれれ……？」

ソラの咳きは勢いを増し始めた級友たちの私語に呑まれて消える。担任は騒ぎを制するように両手を翳したが、それでも状況は收まらぬ。特に女子生徒たちは男子生徒の転入を喜んだのか、話し声を高くした。

「はいはい、静かに。今日からクラスの一員になる雨堂だ。皆、宜しくやつてくれな」

担任は雨堂の肩を軽く叩き、新たに追加された席を指す。

「雨堂、そこが君の席だ。少し席は離れているが……西銘」

「はい」

クラス委員長は誠実な聲音で応えた。

「彼が委員長の西銘だ。分からることは取り敢えず彼に聞いてくれな」

雨堂は担任の言葉に一応反応すると、促されるまま『えられた席に着いた。ただ、彼の醸し出す独特の雰囲気のせいなのか、周囲の級友たちは彼に声を掛けあぐねているようであった。

担任はどうにか生徒たちの私語を収めると、瑣末な連絡事項を述べ、ホームルームを終えた。

雨堂は一限目が始まるまで、彼の席まで出向いた西銘と何やら話をしていたようであつたが、ソラはそれを眺めているだけで席から動かなかつた。混乱に縛り付けられていたのである。

「どういひう」となんですか、雨堂さん？」

昼休みの廊下には生徒たちが開いた弁当だの惣菜パンだの匂いが渦を巻いており、それらが教室から溢れ出した暖房の熱気に温められて、筆舌に尽くし難い異臭へと変貌している。ソラは雨堂を教室から連れ出すると、購買部に寄つて一人分の昼食を揃え、屋上へと

向かつて いた。

人気のない場所を求めていたのである。寒さが本格的に厳しさを増したこの季節、懃々屋上で食事を取ろうなどと云つ醉狂な生徒はいまいと、ソラはそう考えたのだつた。

四角く螺旋を描く階段を足早に上る。

「引つ越して來たんだ」

隣を歩く雨堂は眼鏡の奥に眠たげな半眼を作つて云つた。彼の視線は雄弁で、「ああ、面倒なことになつた」と嘆息するその心中が透けて見えたが、ソラは構わず歩みを進めた。そもそも、教室でこちらが声を掛けた際、彼は文句を云うでもなく、それこそ唯々諾々と後を付いて來たのだ。今更「面倒だ」と云う顔をしたところで逃がしてやらないぞ、とソラは思つ。昨日は云い出せなかつた、二人だけでしたい話があつたのだ。

「引越し、すか。どの辺に？」

「ん？ 蘭山一丁目」

一丁目と云えば地名の元となつた『蘭山』を少し登つた辺りで、慥か大きな屋敷が立ち並ぶ一帯であつた筈だ。彼の家庭はそれなりに裕福なのだろう。安いワンルーム暮らしのソラは、隣を歩く少年は一体どんな素敵な生活を送つているのやらと朧<sup>おぼろげ</sup>気に想像した。

「それと 眼鏡、ですか？ 雨堂さん、視力悪くないですよね？」

「あー、伊達だ」

雨堂はすつと眼鏡の縁を触つてみせる。

「オサレ眼鏡すか」

「馬鹿。 そうじやない」

「変装すか？」

問えば、雨堂は何やら身の入らぬ返事をして黙り込んだ。図星なのだろうか。ただ彼の場合、カラー・コンタクトレンズも併用しなければ、余り意味がないのではないかと思つた。

「でもウチに転校して來るなら、昨日事務所で云つてくれれば良かつたじやないですかー」

「まさか同じクラスになるだなんてな」

「雨堂さん、私が領条園山にいるつて知つてましたよね？」んじゃ  
同じクラスにならなかつたら、知らんぷりするつもりだつたんすか  
？あ、そのオサレ眼鏡、私から隠れるための変装だつたんですね  
！ふへへ、そりやあちょいと甘いつてもんすよ。私、雨堂さんが  
教室に入つて来た途端に見破つてましたからね。　雨堂さん、聞  
いてますか？」

見遣ると彼は購買で買ったピロシキを齧つていた。歩きながら食べ始めてしまう程に腹が減つていたのだろうか。それとも返事が面倒で、自ら口を塞いだのか。も「も」とピロシキを齧る彼の様は何処か子供染みていて可愛らしく、ソラは意図せず笑つてしまつた。  
雨堂はそれを認める、不機嫌そうに眉根を寄せた。

それから会話はぱたりと絶え、一人は黙して階段を上つた。  
間もなく屋上に出ようかと云うところでソラが先行する形になる。  
背後を行く雨堂と、足音が重なつた。彼にズラすつもりはないらしい。ならばと、ソラも足音を重ねたままにしておいた。

無機質なドア　　昨今は飛び降りの防止などの理由で屋上と云うスペースは閉め切られていることが多いのであるが、領条園山はその例外にあつた。屋上への出入りは、下校時間までであれば、原則自由なのである。

ソラは冷たいドアノブに指を絡めた。すつと、指先が冷える。

その時　耳に届く声。会話の内容までは聞きとれぬが、それでも誰か先客がいたようである。ただ、その場に突つ立つていても始まらないので、ソラは戸を開いた。

広がる屋外の風景に人影が二つ。

こちらを弾かれるように見遣る一人の女子生徒。一人とも一年五組の所属で、ソラや雨堂と同級であると云うことになる。

一方は色の淡い髪にやや強いウエーブを当てた少女で、もう一方は、背中まで伸びた黒髪を一つ括りにした地味な印象の少女であり、眼鏡を掛けている。

一人は屋上にソラと雨堂が現れると、まずウェーブの少女、それから眼鏡の少女と云う順でその場を後にした。

「えと、町田さん」

ソラは眼鏡の少女が傍らを通り過ぎる際声を掛けようとしたが、当の本人はそれを拒むかのように速足でその場を去った。

「あの眼鏡」

眼鏡の少女は雨堂の前の席に座っている町田まちだといちやんと云う生徒だった。

「逢引きか？」

屋上の真ん中に歩み出たソラの背後で、雨堂が後ろ手に戸を開めながら問うた。彼は最後のひと口となつたピロシキを放り込み、林檎ジューースのパックにストローを刺した。フュンスに寄つて校庭を眺める雨堂からは、新しい環境に飛び込んだ緊張感だと不安感は微塵も感じられたなかつた。呑気な様子でジューースを吸つている。

「女同士でないことはないでしようが、雨堂さん、そう云うの下衆の勘織りつて云うんすよ。それに、あれはそう云うのじやないと思ひます」

ソラは雨堂から少し離れてフュンスに凭もたれ掛かかると、購買で買った鮭握りを取り出した。それは雨堂に話すべきか否か、決するのに必要な距離だつた。

「私も詳しいところはよく知らないんですけどね。始まりは、いいんちょ……えつと西銘さんと、さつきの森崎冴もりさきさえさんが随分と激しい口論になつたと云う話がありましてですね。ひと月くらい前だつたかな」

「森崎？　ああ、あのウネウネ」

ウェーブの掛かつた森崎の髪を評したのだろうが、雨堂とて他人のことは云えないと思つた。

「ええ、はい。それが西銘さんの方が森崎さんに厳しく詰め寄つていたような感じだつたと云うんです。西銘さんは普段逆も温厚なものですから、ちょっと話題になつたんですよ」

「意外に熱い奴なんだな」

雨堂は感情の読めぬ声でそう云つた。午前中の休み時間は専ら西

銘と会話していたようであったが、仲良くなつたのだろうかと、ソラは横田に雨堂を見た。彼は未だ校庭を薄朦朧と眺めていた。

「どうやら、町田さんが森崎さんに嫌がらせをされていたみたいで、西銘さんがそれを咎めたとか。たださつきの様子を見ると、懲りてないみたいですね、森崎さん」

「下らない」

雨堂は息を吐くように呟いた。その声は田へ獨り、冬日に呑まれて行く。

トドりない それは何に対しても向けられた言葉であるのか、ソラには分からなかつた。

森崎汎が町田巳に嫌がらせをしている件であるのか。それとも西銘がそれを強く責めた件であろうか。或いは、その全て一連の流れに対してもしかれない。

雨堂は煙草を吹かすように、ふうと細く息を吐いた。彼は今、何を吐き出したのだろう。傍らで眺めていると、彼の仕草にはどれも何かしら意味があるように思えて、目が離せなかつた。

「あのですね、雨堂さん」

「んあ?」

雨堂は間の抜けた調子で返事をした。

「えと、今日放課後、事務所に行くんですけど、どうすか? 一緒に」

これは本題ではない。このよつなことを話したいがために雨堂を薄ら寒い屋上へ連れて来た訳ではなかつた。けれども、こざとなると中々話しあせぬものであつた。

「行かない

するすると、雨堂は飲み切つたジュースのパックから口を離して云つた。予想と一字一句違わぬ回答である。

「用があるんだよ」

「そすか」

ソラは応えて押し黙つた。

「大体おまえ、昨日も行つたろ？ 何の用事なんだ？」

雨堂は漸く校庭から視線を外し、身を翻してフェンスに凭れるとこちらを見遣つた。琥珀色の双眸に射抜かれる。ソラはその美しい色合いから足元へと視線を逃がした。

「昨日、来なかつたんすよ、宵子さん」

「あーなるほど」

雨堂は半ば憐れむように唸つた。彼にも経験があるらしい。

「だから、今日は出直しですね」

「御苦労なことだな」

欠伸を噛み殺しながら、彼は更にフェンスへ体重を掛ける。張り替えられたばかりなのか、真新しい金網がぎしこ音を立てた。

二人の間を、冷めた風が吹き抜けて行く。スカートの裾がはためいて、沈黙に響いた。

「あの、ですね。雨堂さん」

今度こそ、と意を決して切り出す。本題を話せと口が急かした。本来であれば、昨日の内に雑談に混ぜて聞いてしまつておきたかったことである。

とは云え、必ず聞かねばならぬと云う性質の話ではなかつた。けれども、ソラとしてはどうしても聞きたいと、そう思つた。

その願望はただ純粹に好奇心から来るものであつて、それは、ともすれば雨堂戒人にとっては迷惑なことなのかもしれない。

しかしながらソラにしてみれば、彼はある意味では同類であつて、けれども対岸に佇むものであり、また他方で全く異質なものでもあると云う、近くにいながら、それでも遠い 非常に気掛かりな存在であった。

ソラにそのように吹き込んだのは件の六ノ宮宵子ろくのみや ようこであり、彼女から「えられた断片的でありまた核心的でもある雨堂戒人についての話に、ソラは強く惹かれた。

だから、聞くだけ聞いてみよう。若し、彼が厭がるような素振り

を見せたなら、その時は潔く引き下がり、素直に謝ろう。そして許されるなら、詳しく聞いてみたい。彼の世界を知りたい。

何故ならそれは、ソラがどう足搔いたところで踏み込めぬ世界であるからだった。

だから、ねずおずと尋ねてみる。

「ん？ 今度は何だ」

雨堂の眸は薄らと濡れていて、艶々としていた。今度はそれから逃げずに、じつと捕らえる。

「あの、ですね」

云い淀む。雨堂の表情が、いつになく穏やかであるように思えた。或いは彼は、こちらの質問の内容を既に知っているのかもしれない。ソラは、遂にその言葉を口こした。

「雨堂さんほ、未来が見えるのですか？」

事務所には香ばしい珈琲の匂いが立ち込めていた。ソラは鞄から一冊の厚い本を取り出すと、机の上に置いた。古いソファーが、ぎしと音を立てる。

色褪せた茶色い革表紙のその本は、金の印字がなされている通り、その表題を『奇と崩』<sup>あやしくずれ</sup>と云つた。六ノ宮宵子は「早いな、もう読んだのか」と薄い笑みを湛えてソラの向かいに座つた。

「いえ、四行で挫折しました。中身が長々とややこしいので、描い揃んでお話し頂けないかと思いまして」

ソラが云つと、宵子は呆れたように眉を動かした。

六ノ宮宵子は恐ろしい程美しい女性である。粒子の細かい肌、艶々と靡く黒髪、長い睫毛、吸い込まれそうな程深い黒色を湛えた眸は、絶妙な曲線を描く一重瞼の下でしつとりと濡れている。何処か妖艶で、けれども少女のような幼さ、無邪気さを残したその顔立ちは十六、七の学生だと云つても疑われまい。けれども、彼女は実際のところ一十一歳で、その数字を聞くと、ソラには彼女が随分と大人であるように感じられた。

左目の下、丁度泣き黒子のある辺りを人差指で搔くと、宵子は困ったように笑つた。

「あんなあ、ソラ。自分のことなんだから自分で学ばないといけないぞ」

「ですから、宵子さんから聞いて学びます」

「口ハ丁だな」

宵子は愉しげに珈琲を啜ると、机に置かれたビスケットに手を伸ばした。

「そうだな……まず、何から話したものか」

どうやら宵子は話してくれる気になったようで、ソラは取り敢えず胸を撫で下ろした。眼前に横たわる辞書のように分厚い本を通読しろと云われても、眩暈がするばかりでページが進まぬのは目に見えていた。

「その本は、崎島源吾さきしまげごと云はばぐれ者の民俗学者の論文を、さる好こう事家うすかが製本したものでな。必然、部数は少なく、中々に貴重なものなのだ。中身は崎島氏が調査のため日本全国を巡つていた際、彼が興味を持つたとある事柄についてのものだが、それが表題にある通りの『奇と崩』と云う奴だ。崎島氏の言葉を借りるならば、崩とは『肉としての人間の進化形』であり、奇とは『靈としての人間の進化形である』らしい。我々のような人でなし連中は、端的でかつ語呂が良いと云う理由で、自分たちをそう称する。言い出しつペガ誰かは知らん。この呼称は近畿地方の幾つかの集落で共通して用いられているものらしくてな。崎島氏も長らく近畿地方に滞在して調査を続けたらしい。まあそれも、もう、何十年も昔のことだが」

軽妙な口調で語る宵子の眼差しには、けれども真剣な色が宿り、ソラは自然背筋が伸びた。目の前に置かれたココアのカップに手を伸ばす気も起きない。

「呼称の源についてだが、『奇』は聞いての通り『妖しい』から来ているのはすぐに分かるだろう。ただ、『崩』の源は少々アレでな。奇の力はな、事情を知らない普通の人間の目にはそれこそ奇跡の業わざとして映る訳で、忌まれるにしろ祟められるにしろ、奇は神秘としての扱いを受けたんだ。ただ、崩は身体能力こそ高いものの神秘性は薄く、結果、化け物だの妖怪だとそれこそ人になり切れぬ獣染みた存在として、疎まれることとなつた。崩はまあ、これは奇にも当てはまることがだが」と大きく異なつている場合も珍しくない。譬えばアルビノの赤ん坊などは嘗て鬼子、白子などと呼ばれたが、崩が生まれ、それがひと目で崩だと分かる場合には同じような扱いを受けたらしい。別段、

崩として生まれたからと云つて、その人物の人格が悪方向へ決定付けられるようなことはないのだが、昔の人々は妖怪染みた身体能力を有する崩を異物として嫌い、恐れたのだそうで、一度と蘇らぬよう叩き潰し、切り刻んで殺していたのだそうだ。復活を恐れて死体を損壊すると云うのはまあある話だ。 異物であると云う点では奇も崩と同様である筈だが、神秘性を伴う奇を殺すのは畏れ多く、背徳うしろめたい。だから奇は遠ざけられこそされ、殺されはしなかつた。反面、力が強いだけ、或いは足が速いだけの崩ならば、それこそ熊や猪を殺すような感覚だつたのかもしれないな。人々はその叩き潰された後のモノを称して『崩』と呼び、いつしかその呼び名は未だ生きている者に対しても用いられるようになつたらしい

「私は、その」

「うん、おまえは崩だ。崎島氏の、或いは私たちの言葉で呼ぶならね」

「崩、すか」

宵子はカップをそつと机に置いた。

「忌まわしい呼称ではあるが、おまえの同類は半ば自虐的に、けれどもそれなりに好んで己をそう呼んでいるよ」

ソラは宵子から目を逸らさなかつた。

初めて気が付いたのはいつだつただろう。朦朧ぼんやりと思い返してみる。

あれは 中学一年の時、預けられていた親戚の家でドアノブを引き抜いてしまつた時だ。それから、シャープペンシルを握り潰し、携帯電話を親指で貫き そこに至つて、漸く自分がおかしくなつたことに気が付いた。

それから一日中、力加減を覚えることに苦心したのを覚えている。  
華奢きやしゃな自分の身体の何処にそんな余分があつたのか。理由は分からぬが突然怪力になつてしまつた自分を恐れながらも、ただ親を亡くした自分を引き取ってくれた親戚に迷惑を掛けまいと必死だつたようと思つ。

誰に云われるまでもなく、怪力のことは他人に云つてはならぬの  
だと自覚していたが、それでも他人にない力を得たと云つことは、  
何處か背徳い愉悦を感じさせ、当初は隠れて鬼や天狗の気分を味わ  
つていた。

そこへ現れたのが六ノ宮宵子であり、孰れ支障を来たすであろう  
日常生活のことを慮つてか、ソラを引き取ることを申し出てくれた。  
親戚一家はどうやらソラの滞在を迷惑に思つていたらしく、ソラ  
を快く宵子に預けた。その一家の様子は、家庭に受け入れられてい  
たと思っていたソラにしてみれば聊<sup>しゃれ</sup>かならず衝撃的であつたが、宵  
子が自分の身体のことを自分よりもよく理解していたことから、ソ  
ラは宵子も自分と同類であるのだと確信し、彼女の元へ身を寄せた。  
けれども、後日、「私におまえのような怪力はないぞ」と云う事実  
を明かされ、ソラは啞然としたのだった。

あれは驚いたと、ソラは腹の底で笑う。けれども、宵子も同類で  
あると云つのはあくまでソラの想像であつたのだから、文句も云え  
ぬし、ソラ自身、そのことは諒解している。

宵子と出会つたのが中学三年の終わりであり、あれからもう半年  
が経つ。ここに至つてされた話は未だ理解の枠に納まりきらぬとこ  
ろもあつたが、けれども己の怪力は、九絵ソラと云う人物が『崩<sup>くず</sup>』  
と云つ人でなしであることに起因しているのだと云うことについて  
は理解が及んでいて、今はそれで十分であるように思えた。

ただ、六ノ宮宵子は何なのだろう。事情に詳しい彼女は、それで  
も普通の人間なのだろうか。いや、それはあるまい。

「あの、宵子さんは崩じやないんすよね？」

「お！ 自分が崩だのなんだと云われても戸惑つていよいようだ  
な」

そう云つて宵子は笑い

「私は奇だよ」

と答えた。

奇と崩の話をされたところで、何處か予想の付いていた回答だつ

た。「我々人でなし」と云つた彼女が崩でないのなら、もう奇であると云う答えしか残つてはいまい。

自分が思わずドアノブを引き抜いてしまうような怪力持ちであることから、崩が「肉としての人間の進化形である」と云うのは朦朧と分かる。けれども、奇が「靈としての人間の進化形である」と云うのは何やら想像がし辛かつた。幽体離脱でも出来るのか、それとも念写や透視が出来るのか。そのようなことを宵子に問うと「出来る奴もいるかもなあ。私は会つたことがないけれど」と割と眞面目に応えるので、ソラはやや狼狽した。<sup>わうぱい</sup>そんなソラを見ると、宵子は愉しげに笑んで「いや、流石に幽体離脱はないかもなあ」と付け加えた。

「えと、じゃあ、宵子さんはどんなことが出来るんすか？　って、訊いちやつても良いんですかね？」

「ん？　ああ、そうだな。私の力は大したものじゃない。見ても詰まらないぞ？」

「でも、見てみたいです」

食い下がると宵子は、「私の力をそう直接知りたがつたのはおまえが初めてだ」と呴くように云つた。

「仕方がない。特別だぞ？」言い触らしたりはなしだ。それから若し万が一、他の奇に会うようなことがあっても、力のことを根掘り葉掘り聞いてはいけないぞ」

ソラが神妙に頷いてみせると、宵子はすつと右腕を右へ伸ばした。一瞬何が起こったのか分からなかつた。

六ノ富音子の右腕、その肘から先が消失したのである。

皿のようになつたソラの目を見て、宵子は声を上げて笑つた。

「そんな顔をしてくれるなら、見せた甲斐があつたと云うものだ。おまえには見えないだろうがな。ここにはポケットの入り口があるんだ。私はそこかしこ、至るところにポケットの入り口を作つて、そこにものを仕舞つておける。ただ、それだけの詰まらない力だ。私は片付けが苦手だから、神様とやらが生まれ付きこの力を授けてく

れたのかもしけないが

我ながら、本当に下らない力だと思う

短く嘆息すると、「もつと面白い力を持つた小僧がいるんだが、

今はちょっとお遣いの最中なんだ」と云つた。けれども、眼前で起

こつた超常現象に驚愕していたソラは、その一言を聞き取る余裕を持ち合わせていなかつた。

靈としての人間の進化形であるとは、即ち　俗っぽく表現するならば　超能力とも云うべき力を持つ人間のことなのである。ただ、宵子が見せたそれはソラが思つていた超能力とは随分と印象が違つていて、ソラは素直に驚愕の虜とりとなつていた。

「どうだ？　話が前後したが、これが奇と云う人種だ。超能力者、と云う陳腐な言葉で呼ぶよりは洒落た呼称だろう？」そして、おまえが崩。加減を誤れば軽々ドアノブを引き抜いてしまうような存在だ。崩は成長期に覚醒することが多いようでな。身体が出来上がりても脳が追い付かないめらしいが。だから、実際に問題を起こすケースも少なくない。まあ問題を起こす起こさぬと云う話をすれば奇も同じ土俵で話をせねばならないのかもしれないが、奇はごく幼い頃に力の仕組みに気付くことが多いせいか、過失的な事故が少ないので。誤つて携帯電話を握り潰すようなこともない。私も子供の頃、自分の力を誰に教わるでもなくどう云つた性質のものか理解していたからな。本能的に知つて生まれて来ているのかもしれない。乳の吸い方を知らない赤ん坊がいないように」

宵子はそこで言葉を切つた。

西陽が差し込み、彼女の美しい顔を黄昏色たそがれに染める。

自分が人間としての枠を幾らかはみ出しているのは実感していたけれども、眼前に座る六ノ宮宵子と云う女性はその上を云つてゐると思つた。

そのような内心を見透かされたのか　宵子は「奇と崩に序列はないよ。それに私からすれば、おまえの剛力の方が羨ましい」と言葉を紡いだ。

ソラとて「どちらが優れているか」と云う話をするつもりはない。

けれども、単純に目の前の麗人を凄いと思つた。

何もない筈の虚空に、彼女はポケットの入り口を作ることが出来るのだと云う。突拍子もない冗談に聞こえるが、また途方もない話のようにも思つ。

それは彼女に云わせてみれば詰まらない力かもしれないけれど、それでも六ノ宮宵子の立ち位置が、如何に訓練したところで決して辿り着けぬ特殊な場所であることには間違はない。彼女は、常人の理解がまるで届かぬ場所に佇んでいる。

「奇と崩 私たちは人間の異種だ。ただ、生物学的には普通の人間とさして変わらないのだそうだ。まあ、崩は身体が並はずれて強靭であると云う違いはあれども、奇などはどうしておかしな力が備わっているのか、その理由は分からぬ。それに、奇の性質も崩の性質も遺伝するようなものではないそうだ。だから 異種と云つよりは、突然変異なのかな。まあ、奇と崩にはまだまだ謎が多い」

宵子は云つた。

人外の身体能力を有する崩。

ささやかな奇跡の業を振るう奇。

二つの単語が頭蓋の内側をぐるぐると回つていた。宵子に引き取られてから半年がたつた今、漸く自分の正体 その一つの回答が得られたのだ。

淡く、溜息が出た。

「でも、その」

云い掛けたところで、宵子はこちらが何を云いたいのか諒解したようである。

「ああ、我々は自分たちの異才のことを隠している。私がおまえを引き取ったのはそう云う経緯もあるんだ。おまえ、他の連中の間で話題になつていていたぞ？ 夜な夜な飛び回つて遊んでいる馬鹿がいるからどうにかしろつて」

それを聞いて、ソラはバツの悪そうな表情を浮かべた。

「やっぱり秘密なんですね」

「うん。はみ出し者は日陰者さ。日向に出ても、良いことなんて何もない。ウンザリするばかりだから詳しい説明は省くけれどね、人間にとつても、奇と崩にとつても碌なことにならない。だから、バレないよう隠す。おまえも私が隠してしまった。まあ、日陰者の暗黙のルールと云う奴だ」

宵子は息を吐くように笑った。

それからも宵子は色々な話をしてくれたように思うが、ソラはそれを朦朧ぼんやりと、何処か上の空で聞いていた。

奇と崩 表の世界に立ち現れぬ人外の者たち。

ソラはこの時初めて、自分が異世界に踏み込んだのと自覚した。

私は崩 怪力持ちの人でなしなのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4860z/>

---

彼の者の眸は何を見るか

2011年12月16日19時37分発行